

学会ハイライト

第118回日本皮膚科学会総会を終えて

(2019年6月6日～9日, 名古屋国際会議場)

秋山 真志

名古屋大学大学院医学系研究科皮膚科学 教授

はじめに

2019年6月6日(木)から6月9日(日)の4日間, 名古屋国際会議場を会場として, 第118回日本皮膚科学会総会は盛会のうちに終了いたしました(図1). 日本皮膚科学会総会は第110回総会から, 国立京都国際会館とパシフィコ横浜の2会場を開催場所として, それぞれの会場で1年ごとに開催されてきました. しかし, 最近2年間は第116回の仙台(会頭は東北大学・相場節也教授), 第117回の広島(会頭は広島大学・秀道広教授)と地方開催が続きました. そして今回, 第118回は名古屋での開催となりました. 京都, 横浜以外の例外的な地方開催であり, 関係各位には, 多くのご苦勞, ご迷惑をおかけいたしました. 学会期間中は, 東海地方が梅雨入りしたこともあり, 雨天もございましたが, それにもかかわらず, 4日間を通してどの会場も大入りで, 結果的には予想を大きく上回る6,700人を優に超える皆様をお迎えすることができました. 名古屋での総会にサポートを賜りました天谷雅行理事長, 理事の先生方をはじめとする日本皮膚科学会会員の皆様, そして, 今回の総会を盛り上げていただいた関係者の皆様に, 心より御礼申し上げます.

今回の総会では, ランチョンセミナーのお弁当, イブニングセミナーのスイーツ, コンgressバッグなど, 決して派手ではございませんが, 名古屋

開催ならではのおもてなしに努めました. 横浜, 京都とはまたひと味違った, 地方ならではの学会をお楽しみいただけたのであれば, 幸甚でございます.



図1 第118回日本皮膚科学会総会のポスター



図2 教育講演にて

継続性ある総会コンセプト

今回の総会からは、専門医を目指す若い先生もベテランの先生も、効率よく皮膚科学の最先端の知識を得られるように、1年単位でのプログラムに加えて、複数年、数年以上の長いスパンで教育講演、特別講演等の内容を決めていくことになりました。その理念のもと、日本皮膚科学会の委員会の1つとして総会プログラム検討委員会が2016年に発足し、プログラム内容の提案を行って参りました。そしてこの第118回総会から、日本皮膚科学会総会プログラム検討委員会主導の継続性ある総会プログラムがいよいよ始動いたしました。その具体的な継続的プログラムの主なコンセプトは以下のようなものでした。

1) プレナリーセッションの数を可能なかぎり増やす

総会では皮膚科領域に限らず、国内外から他の機会にはなかなかお呼びすることのできない、特別な講演者をお招きしてご講演していただきたいと考えました。その際、お一人でも多くの会員の皆様に聴講していただくため、プレナリーセッションといたしました。今回の総会では、土肥記念国際交換講座等が行われるメインセッションを含めて、4つのプレナリーセッションを企画いた

しました。

2) 会期中、常時、英語を使用する会場を1つ以上設ける

日本皮膚科学会の存在感を世界に示すためにも、総会にはアジアはもとより、他の地域からもたくさんの方々に参加していただければ、と願っておりました。海外からの参加者にとっても有意義な総会となるよう、講演を常時、英語で聞ける会場を用意し、英語でのシンポジウム、教育講演、スポンサードシンポジウム、一般演題発表、ランチョンセミナー、イブニングセミナーを行いました。

3) 一般演題の一部を、英語の発表とする

海外からの参加者にも発表の機会をご用意するため、また、国内の若い先生の国際学会での発表への1つのステップとして、英語の一般演題を募集しました。国内外の若手の先生方の英語演題の発表を鼓舞するため、英語での一般演題を応募された海外からの参加者には、審査の結果、優れた演題と評価された場合は、トラベルグラントをご用意いたしました。また、国内からの英語での一般演題の応募者については、学会参加費を免除いたしました。喜ばしいことに、英語での一般演題は69演題を国内外からご応募いただきました。



図3 会員懇親会

4)教育講演の一部を提案型とし、テーマを公募する

会員の多様なニーズに対応し、最新のテーマ、内容を教育講演に盛り込むため、教育講演の一部を会員に広く公募し、集まった教育講演のご提案を日本皮膚科学会学術委員会にて評価して採否を決定いたしました。本総会が公募型の教育講演の初年度であったにもかかわらず、多数のテーマをご応募いただき、多くのご提案を採用させていただきました。

プログラム内容について

今回の土肥記念国際交換講座は、スウェーデンのウプサラ大学の皮膚科のAnders Vahlquist教授 (Department of Medical Sciences, Dermatology and Venereology, Uppsala University) に、教授のライフワークである魚鱗癬の研究についてご講演いただきました。今回の講演内容は、Vahlquist教授が長い間Editor-in-Chiefを務めておられた雑誌『Acta Dermato-Venereologica』の100周年記念号に掲載され、日本皮膚科学会の土肥記念国際交換講座の講演内容であることが付記されます。また、海外からの特別講演には、イスラエルのテル・アヴィブ大学の皮膚科のEli Sprecher教授とアメリカのイェール大学の皮膚科のKeith Choate教授に、

最新の知見をご講演いただきました。

また、今回の総会では56の教育講演(図2)に加えて、特別企画として日本皮膚科学会のAIワーキンググループ(委員長は大阪大学・藤本 学教授)によるシンポジウムとTelemedicineワーキンググループ(委員長は東北大学・相場節也教授)によるワークショップを開催いたしました。

例年通り、皮膚外科、皮膚病理、ダーモスコピーの各道場とスペシャリティナース講習会も盛会のうちに開催いたしました。

一般演題は、日本語での発表と英語での発表、それぞれ多数のご応募をいただきました。各セッションの座長の先生方に抄録の評価をしていただき、優れた演題を口演発表といたしました。

学会テーマ「笑顔で歩む、皮膚科学と共に！」

近年、日本の医療と医療関係者を取り巻く環境は、いろいろな面で急速に厳しくなっています。地方の地域医療はその維持がますます困難になり、都市部では、勤務医の労働環境の悪化に伴いフリーター医師の増加が問題となっています。このような状況で、若い日本皮膚科学会会員も、なかなか将来の夢を描くのがむずかしくなっているのではないのでしょうか。しかし、そんな閉塞的な社

会環境にも負けず、皮膚科学は着実に進歩しています。病因のわからなかった疾患の病因が解明され、治療法のなかった皮膚病の治療法が開発されています。厳しい時代を、「皮膚科学」という灯りを頼りに、若い会員もベテランの会員も、笑顔で皮膚科医人生を歩んでいただきたい、そのような願いを込めてこの学会テーマを決めました。専門医を目指し研修中の先生から大ベテランの先生まで、今回の総会で皆様が楽しく学んでいただけたのであれば、何よりです(図3)。

おわりに

総会前は少なくとも毎週火曜日の教室スタッフ会議の後に、午後7時過ぎくらいから、室 慶直事

務局長、河野通浩実行委員長と私でミーティングを毎週、行っていました。総会開催翌週の教室スタッフ会議の後も、同じメンバーと私は自然に、その場に残っていました。そして「あー、そーか、もう準備会議、しなくていいんだ!」と、顔を合わせて笑ってしまいました。

ここに書ききれない多くの皆様のご協力、ご支援により、今回の総会を無事開催することができました。本総会にご参加いただいたすべての皆様、準備にご尽力いただいた室事務局長、河野実行委員長をはじめとする名古屋大学皮膚科教室員の皆様、日皮会の総会チームの皆様、すべてに心より御礼申し上げます。皆様、本当にありがとうございました。